

Title	醫者と天文臺
Author(s)	
Citation	天界 = The heavens (1934), 14(154): 154-154
Issue Date	1934-01-25
URL	http://hdl.handle.net/2433/165475
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

一月一日午前〇時にはシリウスが南天高く輝き、この頃太陽と赤経が十二時間離されて居るのである。地上は冬枯れの蕭條たるもので、所謂萬目荒涼たる殺風景の時であるが、仰いで天を見るときは、天上の花が咲き亂れて、天空の最も派手な時で、この際見える一等星は大大座 α 星、小犬座 α 星、オリオン座 α 、 β 星、双子座 β 星、龍骨座 α 星、獅子座 α 星、駱駝座 α 星、牛座 α 星の九星を一時に觀望し得るのである。犬の星座三つも同時に見られるのである。寒さは厳しいが空中に最も水分が少ない時であるから、天體觀測には最も適したる時季である。

犬が雪中に戯るゝ様な元氣を出して、天に親しまれることをお奨めする次第である。(終)

醫者と天文臺

昭和8年九月3日堺杏林趣味の會に加はつて京都の花山天文臺を訪れた。一通り何かしら趣味を持合はせては居るが、みんなが醫者である事は間違ひなかつた。だから醫者としてはそれぞれ専門の學問の持主である筈だが、凡そ醫者といふものほど學問から入つて世間に出切つて居るものはあるまいとは平常でも時にふれて思ふことだが、此の醫者を天文臺の上に立たせてばかんとさせてみる風景ほどのんびりすぎるものはあるまい。尤もその日みなさんたちはそれぞれ何か得る處あつた様子の緊張を帯びて歸へられたのだから、醫者なんて天文臺に立たせると随分のんびりしてやがるなと思つたのは一場の専門學説を吐かれた山本一清氏と私だけかも知れぬ。しかし又私自身に於ても、その日の場面を客觀的に描いてみて、さう想つてみるだけのことで、のんびりに幾らかの底もある。

×

都ホテルでみんなで夕食をしたゝめた。丹羽さんの令息が露臺で寫眞をとつて下きつた。しのびよる秋といふやつが夏服を引張つて想ふことはないかとたづねるやうな夕風のそよぎだ。天文學者のマダムは間違なく星の如くに美しい。ど

うも醫者なんて人の顔を朝から晩まで見てゐると紳士的儀禮の席でもだいいちにこれだ。こんな軽い氣持を叩きつけるやうに自動車が私たちを山の天文臺へ抛り上げた。

×

望遠鏡でお月様を見るとしらひ⁷のやうに大きく圓く、その表には寫眞や繪で見る洲や山の如き月の國が美しく大うつしに、などゝ思つてゐたことは大間違ひ何よりも天文臺のもつ嚴肅さに壓倒され氣味で、星圖を披げて黙々と執務して居る人は恰も聖壇に侍せる使徒の行のやうである。それらの仕事は世界中につながるのある一線一點の上にうごいてゐるのである。ネオンサインの光りの波うつ町の地上をちよつとばかり離れた山から限り無き天體に頭を突込んで幾千年もかゝつて地球にとゞく星の光の旅路をいたはる、貴い淨らかな仕事だなとつくづく思つた。さて京洛の灯影を我等の記憶をひるげるだけ擴げた視野の星座と見下してふと、何がなし湧き上つて来るのは三高時代の青春の學生だつた自分の面影さては友の面影。此時、追憶の過去は宇宙の果よりも。遠い天文臺に立つて私は人生の觀測をした氣がした。(圭虫の舎)